

「なると金時」ブランドの発展に向けて

元徳島県鳴門藍住農業支援センター

ひろ た けいすけ
廣田 恵介

1 栽培地域の概要

「なると金時」は、徳島県東北部の沿岸地域（鳴門市、松茂町、北島町、徳島市）の砂地畑で栽培されている。砂地畑は歴史的成立と畑の立地条件から①砂丘畑（自然堆積した畑：12.5%）、②石炭殻畑（湿地に石炭殻を埋め、砂を客砂したもの：14.0%）、③造成畑（水田に山土、砂を客砂したもの：73.5%）に大別される。

2 栽培の歴史

明治初め、鳴門市里浦地区出身の「西上
国蔵氏」は大毛島で開墾を行うとともに、
九州（長崎県大村市）からとりよせたカン

シヨの中から優良な系統「アイノコいも」を作ること成功し、産地として名声が高まったと言われている。明治前期に、鳴門市では、すでに200ha以上のカンシヨ栽培が行われていた。

鳴門市里浦地区では塩害で作物の作れない低湿地であったが、ここを石炭殻で埋立て、上層部に砂地を客砂した砂地畑（殻^{から}地）でカンショを作付けたところ、良質のカンショが生産されたことから栽培が広まっていった。

昭和21年には南海大地震の影響で地盤沈下がおこり、塩害が深刻化したため、畑地化への転換が検討された。昭和40年代後半



「なると金時」産地位置図

には集団客砂により166haの造成畑（長江、徳永、吉永、矢倉地域）ができカンショ栽培が広がった。

＜鳴門市の栽培面積の推移＞（単位：ha）

明治初期	265
明治後期	297
大正10年	313
昭和5年	307
昭和44年	391
昭和60年	610
平成23年	612



「なると金時」栽培風景（6月）

3 現状

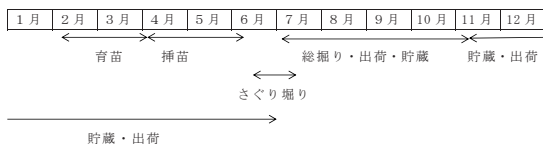
徳島県の平成25年のサツマイモ栽培面積は1,140haで、鹿児島県（13,700ha）、茨城県（6,660ha）、千葉県（4,440ha）、宮崎県

（3,440ha）に次いで熊本県と同面積の全国第5位である。このうち「なると金時」の栽培面積は1,133haで、徳島県のほぼ全てが「なると金時」である。

平成25年度のサツマイモ販売額は63億円で、県内の野菜販売額ではニンジンに次いで第二位の位置にある。

京阪神や京浜地域を中心に販売され、2地域での販売量は58.8%を占める。

4 作型



5 品種

昭和31年頃に、早掘りサツマイモの岐阜1号、35年に高系14号が導入された。

昭和54年頃から、高系14号の派生系統である土佐紅や坂出金時や土佐紅が導入された。

これらの品種から皮色が赤く、食味・外観に優れた系統を選抜し‘なると金時’として育成された。

平成18年4月に「商標法の一部を改正する法律」が施行され地域団体商標制度がス

仕向別販売量実績（平成25年）

	近畿	中京	京浜	北陸	中国	四国県外	県内
販売量 t	10,214	3,906	2,275	4	2,707	2,031	2,438
割合 %	42.5	16.3	9.5	0.0	11.3	8.5	10.2

作付面積・収穫量の推移

	H2	7	12	17	22	24	25
作付面積 ha	1,320	1,330	1,330	1,240	1,160	1,150	1,140
収穫量 t	25,700	28,300	28,300	29,600	26,700	27,300	27,800

タートしたため、平成19年4月に「なると金時」の名称で認証を取得した。この名称が使用できるのは、砂地で生産された高系14号の系統に限定されている。

6 栽培方法

○親苗

「带状粗皮病」対策としてウイルスフリー苗が用いられている。

各JAが保有している系統を農家からの注文数に応じて種苗会社にウイルスフリー苗の生産を依頼し、親苗としている。

本ば10a 当たり必要親苗数150～200本

○育苗ハウス

多重被覆または電熱線を使用したハウスに植え付ける。床温は活着・萌芽までは25℃以上、活着・萌芽後は20～25℃とする。室温は活着・萌芽後30℃を越えないように換気して徒長を防ぐ。

○栽植密度

早掘り 畝幅75cm 株間45～55cm

必要苗数 2,400～3,000本

貯蔵 畝幅75cm 株間45cm

必要苗数 3,000本

○土壌消毒

立枯病対策としてクロルピクリンの土壌消毒が必須となっていることから、畝たて時に灌注処理を行っている。この時、クロルピクリンの揮散防止のためポリフィルムによるマルチングを行っている。マルチングは畝内の水分保持と雑草対策も兼ねており、幅100～110cm、厚さ0.02～0.03mmのポリフィルムを使用している。

また、クロルピクリンの揮発速度を抑えることのできる難透過性フィルム「ハイバリアー」を使用すると、立枯病の防除効果が高まるため、平成25年頃より利用が広まっており、現在3割程度で使用されているとともに、クロルピクリンの使用量を減少させても立枯病による被害の低下が起らないことから、近年ではクロルピクリンの使用量を減少する生産者も出てきている。

難透過性フィルムは揮散防止にも優れているためクロルピクリンの危被害の減少も起きているが、土壌水分が多いほ場ではクロルピクリンが抜けきらない場合もあるので注意が必要である。



サツマイモ立枯病



難透過性フィルム「ハイバリアー」

7 近年新たに発生している病害虫

○白腐病

白腐病の病原菌はこれまで、*Pythium scleroteichum*や*Pythium spinosum*等が知られていたが、平成22年に徳島県で発生した白腐病は*Pythium myriotylum*と呼ばれる新しい病原菌であることが県病害虫防除所等により判明した。この病原菌は従来の*Pythium*菌より高温性であるため症状も従来の白腐病と異なり生育中に発生する。外観の症状は、指で押したようなくぼみあるいは指で締め付けたようなリング状くぼみがみられ、芋の内部は褐色と白色のまだらに腐敗する。



外観の症状



内部の症状

白腐病が発生するほ場が変動することや、一つのほ場での発生率が多くて数%程度であることから、感染経路や防除対策等の解明が困難な病害となっている。

○ゲンバイムシ

平成28年8月に突如被害が大きいほ場が発生した。症状はハダニによる被害と似ている。その後もこの年ほどの被害量ではないものの、被害が発生するほ場が見られるため注意が必要である。

○アザミウマ類

これまでアザミウマ類の被害は、植付直



被害が大きかったほ場



被害葉



被害葉（表）



被害葉（裏）

後に発生するとつる先端の生育が阻害される症状は見られていたが、発生はごく限られたほ場であった。昨年6月成育中の葉にこれもハダニによる被害と似た症状が発生

し調査してみるとアザミウマ類によるものであった。今年も被害が発生しているほ場が多く見つかっており、今後注意が必要である。